

フレンズ だより



がんばる帰国生シリーズ「次世代へつなぐ恩送り」より
ドイツのインターナショナルスクールでの卒業式 の写真

CONTENTS.....

- P2-7 特集 海外生活、苦労話アレコレ
- P8-9 がんばる帰国生シリーズ
 「次世代へつなぐ恩送り」 芳賀 久美
- P10-11 海外レポート 41 「海外スポーツ観戦体験」
- P12-14 フレンズ 活動紹介
- P15 活動報告
- P16 学校案内／編集後記

特集：海外生活、苦労話 アレコレ

初めてでも何度目でも、海外生活での苦労はつきもの。さまざまな出来事も時間が経てば笑い話やいい思い出になるものです。そんなエピソードをお届けします。



特集 海外生活、苦労話アレコレ！

コロナ禍で滞っていた海外への赴任が動き出してきました。
初めてでも、何度か行っても、異なる生活にあたふたすることも。
困ったこと、乗り越えたこと、さまざまな経験をお届けします。

子どもが現地の人を見て大泣きです！

我が家は長女が3歳1ヶ月、次女が11か月の時にアメリカに赴任となりました。生まれて初めてアメリカ人という身体が大きくて、金髪で、何を言っているのか分からない言語を喋る人を見た長女は、怖くて怖くて大泣きしていました。これには、困りました。

なんとかしなきゃいけないと私が考えた事は、次女と3人一緒に、何しろ毎日外出することでした。ショッピングモールなどアメリカ人がいっぱい歩いて喋っているところに連れ出し、その風景、環境に慣れさせました。オープンカフェでは、親子3人ゆっくりお茶を飲んで行き交う人を見せました。それから、自宅近くに住んでいる高校生の女の子にベビーシッターを頼みました。放課後、週2回家に来てもらい、長女と次女、彼女の3人だけにして、英語と一緒にゲームをしたり、歌を歌ったりして遊んでもらいました。これが対処法で、うちの長女の場合はバッチリ上手く行きました。



この長女、商社に就職したのですが、辞めて、ニューヨークでMBAを取得、現在日本からの駐在ではなく、外資企業で働いています。多分日本人は彼女一人だけの会社。Kindergartenに通う5歳の子育て中のお母さんですから不思議です。

でもこのコロナ禍、人の波の中には入っていけない昨今、この対処法ではダメかしらね～。

日米、双方の学校で苦労しました！

我が家の初めての海外生活は、夫の北カリフォルニア UC Davis 大学院留学でした。新学期に合わせ夫は6月に、家族は10月末にCAに着任しました。新学期が始まっていたので5歳の息子の幼稚園を探すのに困りました。見つかるまでの間、息子は退屈していましたが、幸いにも Church の幼稚園が見つかり、週3日午後のクラスに通園できました。3年間多くの国の良い友達に恵まれ、英語にもほとんど不自由せずに順応できました。6歳になった時、Davis には日本語の補習校がないので領事館から日本語の教科書を送って貰い、家庭で「あいうえお」から教えました。

小学校2年生で日本へ帰国したのですが、その時の方が大変でした。それまでに習っている漢字を書けないことが特に困りました。息子の希望で毎朝学校へ行く前に漢字の勉強をしました。夫の職場がある地元の小学校には海外帰国の子どもは初めてで、テストの時には先生が特別にそばに来て助けてくださいました。



その後、高校生の時に再びアメリカへ。2回目の渡米でしたが、ESL のクラスで英語を学びました。必須となるアメリカの政治と歴史は大変で、担当の教師が理解して助けてくださいました。得意とするバスケットのチーム(バーシティー)に入れたことは幸いで友達には恵まれました。多少他にも苦手な科目があり、父親が仕事から戻り Help しました。仕事の付き合い後、酔いもすっかり醒めて Help していた様子を思い出します。

ご近所付き合い「叩けよさらば開かれん」

ロンドンに引っ越して間もない頃でした。お天気が良いので、向いにある公園にお散歩に行こうと玄関で靴を履いていると2歳になる娘が一人で外に出たので、慌てて追いかけると、玄関のドアがバターン。え？もしかしてオートロック？？鍵も持たず飛び出してしまったので、家に入れなくなってしまいました。主人はシティーの会社。幾らなんでも「鍵を持って帰って来て」とも言えず軽装で出たので主人の帰るのを待つ訳にもいかず、お向かいの老夫婦の家に助けを求めました。とても親切な方々で色々手を尽くして下さい、近くで作業をしている職人さんを呼んで来て下さいました。良く聞くと、我が家は築80年位の家。窓はサッシではなく何とパテで枠を固



【窓ガラスは全てパテで固定】

定しているだけとのこと。慣れた手付きで、裏玄関の窓枠のパテを剥がし、窓ガラスを外してドアを開けて下さり、無事に入ることができました。知り合いもない心細い状況だったので、老夫婦の対応はとてありがたいものでした。

数日後、感謝の気持ちを込めてお茶にお誘いしました。当日おじいさんは背広に帽子、手入れの行き届いた靴を履き、おばあさんはスーツにバックを持ちハイヒールを履いて我が家にいらっしゃいました。道を渡ればすぐ我が家なのにもかかわらずです。お二人は自分達の見栄の為に洒落をして来たのでは無く初めて訪れる我が家の為に敬意を表してお洒落して来て下さったことを知りました。さすが、イギリスのジェントルマンご夫妻だと感心しました。

鍵騒動ですっかり親しくなり日本に帰国してからクリスマスカードを交換しました。ある年、おばあさんからおじいさんが亡くなったという知らせを頂きました。それから数年経ち、アメリカに住むお嬢さんからおばあさんが亡くなったという知らせを頂戴しました。いつもおばあさんが私たちの話を娘さんにしていたそうです。それで私たちの住所を知っていて連絡を下さいました。今はもうお目にかかれませんが、懐かしい思い出です。思い切って助けをお願いすることでご近所付き合いが上手くいった例です。

その後、オーストラリアに赴任した時のこと。夜遅くに旅行から戻り家に入ろうとすると、鍵が見当たりません。バッグの底をひっくり返しても、どこにもありません。携帯も無く、お隣に電話を借りに行きオーナーに連絡をして合鍵を持って来て頂きました。これ以来、お隣と仲良くなり、旅行で家を空ける時は、「鍵を持った？」と聞かれ「留守中芝生のお水はあげておきますね。」と親切にして頂きました。

極め付けは、ニュージーランドからオーストラリアに再度転勤する時です。最後の日、お隣にお別れを言いに行き、家に入ろうとすると、鍵が～。裏玄関から家の中を見ると、鍵を入れたバッグが鎮座していました。「さようなら」を言いに行ったお隣に「家に入れない～」と助けを求めに行きました。ご主人が長い梯子を持って来て下さり、「2階のどこかの部屋の鍵が開いてないかな～」とベランダに上りチェックして下さいますが、引っ越しの日。鍵は全てチェック済み。結局お隣でお茶を飲みながら合鍵屋さんを待ちました。引っ越しして来た時にご挨拶に伺い、暫くしてお隣の奥様が「Welcome to Seacliffe Avenue」と書いたケーキを届けて下さり、とても仲良くさせていただいていたので、こんな時にも助けを求めに行けました。



【ガレージが裏なので普段は裏口を利用】

困った時のご近所頼みで お付き合いがスムーズにいきました。思い切って助けを求めると、皆さんとても親切に手を差し伸べて下さいました。自分の不注意を棚に上げてなんですが、「叩けよさらば開かれん」が教訓です。



転入したばかりで、すぐ秋休みに！

1 回目の渡米の時に生まれた娘が 2 回目は、5th grade で地元の Anaheim hills の小学校に転入しました。英語の勉強をほとんど準備せずの渡米でした。この学校には ESL のクラスもなく、日本語のできる Helper の人もいませんでした。日系の生徒はいましたが、日本語は No。担任の先生も困り「日本語の本を読んでいなさい」とのアドバイスで、登校するときは日本から持ってきた日本語の本を持たせました。5th grade の子ども達はロアルドダールの本を読んでいたもので、日本から日本語に訳された本を送ってもらい娘に与えました。



アメリカの学校生活にまだまだ慣れる前に秋休みが始まってしまいました。アラ～！ですヨ。担任の先生に相談したところ、近くにある Nature Center を教えてくださり、クラスを取りました。娘は週 3 日のクラスに大変興味を持ってくれました。ここで友達ができ、少しずつ英語に慣れていきました。その後学校が始まると、幸いな事に以前 ESL の先生をしていた方が個人的に英語を Help してくださいました。友達にも恵まれ、ほとんど不自由ない生活ができる様になり、渡米 6 ヶ月も過ぎると心配なく生活に順応できたと思いました。

本人の希望で日本語の補習校には行きませんでした。日本語の教科書を領事館まで取りに行き、家庭で 1 週間に 2 日、声を出して国語を読ませました。同時に算数も先ず読ませてから問題を解きました。

エレメンタリースクールを無事卒業し、ミドルスクールに進級。娘の希望で、ハイスクールで ESL のアシスタントをしている女生徒に 1 週間に 1 回家庭教師をお願いしました。2 年生で帰国するまでの 1 年間、彼女のお陰で力がついたと思います。

現在、アメリカに暮らす娘に当時のことを振り返ってコメントをもらいました。「行く前に予定、親の気持ち、方針を具体的に話して欲しかった。将来はアメリカに残

るのか、日本へ帰国するのかも。。。」

これって大切な事ですが、17 歳の息子がいて、娘は 10 歳で難しいですね。会社の方針も変わるし、子ども達は 2 人とも両手を上げて渡米を賛成したのですから。親も無知で必死でした。子ども達は何より多くの友達に恵まれた事と Active な性格が幸いしたと今は思っています。

ボイラーが故障！

海外ではよくあることだと思いますが、ある日我が家のボイラーが故障しました。すぐに大家さんに言って、修理の人を呼んでももらいました。まずは、予定の時間に来ないことはよくあることです。そして、来てみてもらえたのですが、新しい部品が必要だとのことでした。在庫がないため、これから注文するので、しばらくかかるとのことでした。幸い、季節は暖房を必要とする時期ではなかったもので、それはラッキー？でした。

結局どれだけ待ったのか… 時間が経ったのもう忘れてしまいましたが、少なくとも 10 日はその状態でした。ボイラーは、暖房のためとバスルームへの給湯でした。幸い、キッチンのお湯は別に小さな給湯器があったので、キッチンの流しで顔や髪を洗い、お湯を沸かしてたらいいに入れて行水したりしました。たらいといっても、洗濯用のもので、だるま座りできゆうきゆうでした。ちょうど、主人が出張中だったこともあり、中学生だった娘とふたりでしたので、そんなことで乗り切りました。

気の毒に思った主人が、週末はホテルをとってくれました。ブリュッセルの市街地のホテルは、時期にもよるのかもしれませんが、ビジネス利用が多いため、週末の方が安くなったのです。ちょっといいホテルに、主人が貯めたポイントで泊まりました。目的はお風呂に入ることでしたが、娘とふたりで、ちょっとリッチな週末を過ごすことができました。



暗闇のマンハッタンで

2003年8月14日午後4時過ぎ、マンハッタンで食事と買い物を満喫した私は、夕食の心配をしながら息子と姉と一緒にグランドセントラル駅に向かっていました。足早にマディソン通りを歩いていると、突然周囲の信号機が点滅し始め、あっという間に異様な雰囲気包まれたのを覚えています。人々が停電だと騒ぎ始めたのを耳にしても、どうせこの周辺だけだろうと甘くみたのもつかの間、駅に着くと電車が止まり、タクシー乗り場も人の列ができ、広範囲にわたり被害が及んでいるという現実を知らされるのです。これは「北アメリカ大停電」に巻き込まれた時のちょっとした冒険のエピソードです。

電車もタクシーもだめならバスだ！ということで、以前利用したことのあるバス停でバスを待つことに。バス停にはまだ人も少なく、通りには車も流れており、このままバスに乗って帰れるとホッとしたのですが……。いつまでもたってもバスは来ず、そのうちにバス停は人だかりに。遠くにバスの姿が見えるや否や人が波になってバスに押し寄せる始末。バス停など関係なく、波の先頭の人が遠くでバスを止めてしまい、すでに乗客でいっぱいらしきバスに我先にと人がなだれ込む光景をただ遠くで見ただけでした。誰かが「妊婦を乗せろ」と叫んでいましたが、あまりの人の多さに乗れたかどうか知る由もなく。とっさに姉も「小さい子どもを連れていきます」と叫びましたが、誰も気に留めてはくれません。

自力脱出が難しくなった現実を悟り、次に向かったのは主人のオフィス。その日は主人に告げずにマンハッタンに遊びに来ていたので、知らさなければと思い慌てて電話するも時遅し。携帯電話はまったく繋がりません。オフィスに行けば何とかかなと思い、主人のオフィスが入るビルに向かいました。そのころには、町中が歩いて帰宅する人たちで溢れ、ビルのロビーも行き場を失くした人たちでいっぱいでした。簡単にエレベーターに乗れると思っていたのですが、2001年のテロ以降セキュリティが厳しくなり、オフィス関係者以外はオフィス階への入場が禁止されていたのです。ガードの人に状況を説明しても許可してもらえません。携帯電話が繋がらない状況で、どうにかしてここにいることを主人に伝えなければ。そう思った私は、もしや同じ会社の方がこの人混みにいるかもしれないと日本人らしき人に声を掛け始めました。幸いなことに、すぐに私の状況を心配してくれる日本人が見つかったのです。そしてその方はビルの管理室へ行き、私が主人に会うためにエレベーターに乗る許可を取ってくれました。息子を姉に預け、私はその方にエスコ

ートしてもらいオフィスのフロアへ。しかし着いてみるとすでにオフィスには誰もおらず。バスに並んだばかりに・・・と後悔したのです。こうなったらどこか安全な場所を見つけて野宿するしかないと思っていると、その方が「どこも行くところが無ければうちのオフィスで休んでください」と声を掛けてくれました。最後に頼れる場所ができたことをどれほど心強く思ったことか。今思い出しても感謝の気持ちでいっぱいになります。

ロビーに戻った私は、一体主人はどこに、と半信半疑で自宅に電話をすると、主人が電話に出たのです。話によると、たまたまその日に車で通勤していた仲間が家まで送ってくれたとのこと。家に帰ると誰もおらず、携帯もつながらず心配していたというのです。マンハッタンに置き去りにされていると知った主人は相当驚いた様子で、すぐに車で迎えに行くと言ってくれました。しばらくすると、マンハッタンに住む主人の同僚が、主人から頼まれたと、暗い中を歩いて私たちの様子を見に来てくれました。主人は夜になると治安が悪くなることを心配したようです。ちなみにこの年の停電では、強盗や略奪の話は聞かれませんでした。あとは待つだけと安堵し緊張がほぐれたのか、主人が到着するまでの数時間、真夏のなま暖かい風にあたりながら、周囲の喧噪を楽しんですらいったように思います。自宅に着いたのは真夜中過ぎ。疲れ果てて寝入っている息子をベッドにおろし寝顔を見ると、自宅がいかに安全な場所だったかを思い知ったのです。



この8時間に見た光景は映画のシーンのようで、現実離れしたものでした。いつ自分が思いもよらないことに巻き込まれるかわからない、という気持ちをもって生活することの大切さを学んだように思います。そして窮地を無事乗り越えるには人々の思いやりのある行動が欠かせないことも身に染みて感じました。助けてくださった方、適切な判断をしてくれた主人と姉、ぐずりもせず我慢して付き合ってくれた息子に感謝の言葉しかありません。助け合うことの大切さを実感した日になりました。

誰も、何も、来てくれない！

ニューヨークに駐在していたころのこと、アメリカの家は内装をリノベーションしていますが、古い家が多いのです。おそらく築60年くらいの家に住んでいた時、窓を開けてみたら閉まらない。建具がきしんでしまっていてうまく収まらない。大家さんに連絡してみたら「どうして開けたんだ！」と。え？普通窓って開けるためにあるでしょ？？直ぐに修理屋さんを手配してくれたのですが、その修理さんが来ない。ニューヨークの冬はとても寒いです。外気が入ってきてどんどん冷え込んでくるので、「早くきて！」と修理屋さんには電話をかけるも、「今向かってる」と言うばかり。結局朝窓をあけて修理が終わったのは夕方。もう二度とここで窓はあけるまい！と心に誓いました。



そんな窓も開けられない家から脱出たく、不動産屋さんに他の物件を紹介してほしいと依頼。しかし、待てど暮らせど不動産屋さんからは連絡がなく、今物件がないのかな〜？とHPを見てみるとたくさんある！電話してHPに載っている物件をみたいと言ったら、もうそれは決まっちゃっている、と。HPがアップデートされていない。じゃあ他にはないの？と聞いたら、「今探している」そしてまた待つこと数日、連絡なし。当時高校生だった娘に話したら、そんなの毎日「どう？」って電話で催促しないと働かないよ、と。それから毎日電話で催促して、やっと引越し先が見つかりました。

いつになっても来ない！

アメリカで、日用雑貨をネット注文して到着を待っていたこと。3週間しても届かない。いくら、アメリカ人仕事が遅い、アメリカ広し、と言っても3週間は掛かり過ぎだろう、と電話で問い合わせしてみたら、「配達済みになっている」と。え？いつ？受け取っていな

い、と主張したら、「わかった、じゃあもう一回送るから」と意外にあっさり。無事に2回目は受け取ることができたのですが、最初の荷物はどこに行っちゃったの？

ニューヨークは一度ドカ雪が降るとそのまま根雪になって春まで解けません。1回目の配達の時、フロントヤードに投げ入れられていて、それに気づかずその日の夜から大雪が降って朝には20cmくらい積もっていました。それが春になって溶けだしたら、小さな段ボール箱が出てきました。雪の下で冬眠していたとは・・・。



海外で暮らすことは不便なことばかりです。そんなときは、**潔く諦める！**ここは日本ではない、そして私はずっとここにいてわけではないから、ひたすら時間が経つのを待とう、いつか日本に帰る日がくることを祈って**耐え忍ぶ！**しかありません。。。

1日で2回も・・・

コロナの前年、パリとベルリンに旅行しました。特にパリの観光は25年ぶりで楽しみにしていました。そんな私の浮かれ気分に水を差すかのように、たった4日間のパリで2度もスリに遭遇し、肝を冷やしました。

最初はルーブル美術館前の広場にて。若くて感じのよい女性2人組に「ユニセフのアンケートにご協力お願いしまーす」と声を掛けられ、つい立ち止まって差し出されたクリップボードに目を通したのが間違いでした。一人の女性が私に内容を説明している傍らで、もう一人がクリップボード下にちょうど隠れている私のウェストポーチをごそごそ開けているのに気が付き、ぎょっとして一目散に逃げました。爽やかな朝、ルーブル前の広々とした空間で、「モナリザ見ようね！」と家族とわくわくしながら向かっていった矢先のまさかの出来事、萎える気持ちを何とか切り替えて鑑賞しました。

さらにその日の午後、移動中のメトロ内。混んだ車内に

乗り込んだところ、目の前の中年女性が、娘をドア付近より少し空いている車内中ほどに入れてくれました。「いい人だ」と思ったその瞬間、その女性がやおら私のウェストポーチを開け始めています。あまりの展開に驚愕してまずは背中を向けましたが、車内は混んでいて思うように移動もできず、次の駅までの数分間、背後から何かされやしないかと恐怖でした。次の駅で家族全員一目散に逃げました。その中年女性は、一部始終を見ていた周囲の人々に捕らえられて次の駅でホームに出され、取り囲まれてワーワー騒いでいたようですが、我々4人は顔を覚えれるのも関わるのも嫌で、とにかく逃げました。



私の脇も甘かったのですが、次の観光地ベルリンでは全く何事もなく平和に過ごせました。今振り返ると、この2回のスリ未遂では「逃げる」しかできず何とも消極的な対処法でしたが、「まずはその場から離れる」「むやみに関わらない」というのもとっさの策としては良かったかなと思っています。また、ウェストポーチではそこに大事なものが集中していることがあからさまで狙われやすいと痛感したので、次回観光に行ける機会があれば、薄いネックポーチにして上着の中に隠す、クレジットカード数枚をあちこちに分散して持つ、現金はごく少額にして財布ではない小袋に入れておく、などできる限り対策を取ろうと思いました。

喧嘩は日本語で！ ～でも、マネしないでね～

中国では日本企業のほとんどが駐在員や家族の運転を許可せず、タクシーを使っています。社用車が空いている日には奥様達の買物に便宜を図る企業もありました。友人の社用車にあと一人乗れるからと買物に誘われた時のこと。目的のお店に向かって大通りから小さな通りに曲がったところ、その右側のさらに狭い脇道から1台の車がゆっくりと進んで来ました。当然「止まるだろう」と思ったその瞬間、そのまま突っ込んできたのです。

助手席に座っていた友人は急ブレーキにおでこをぶつけてしまいました。私たちが友人の怪我を心配していると、相手の車から運転手が出てきました。こちらの運転手も外に出ます。と、相手がワーワー大声で怒鳴り始めたのです。どちらの運転手も紺色のスーツに白いワイシャツ姿ですが、相手は大柄で角刈りに真っ黒なサングラス。さながら任侠映画の出演者といった感じです。こちらは小さく痩せておとなしい人ですが、「え?!、何も言わないの?」上から怒鳴られて言い返さずに下を向いています。

すると、とても中国語が上手なおでこをぶつけた友人が、おでこを押さえながら車から出て、相手に丁寧な中国語で応戦しました。「こちらはまっすぐに走っていてあなたが脇から出てきたのだから、止まるべきだった」と。すると、この運転手、今度は友人に向かって怒鳴り始めたのです。さすがに腹が立った私、「あんたね! こっちは一直走(まっすぐ走る)であんたが横から出て来たんでしょ! だいたい、おでこぶつけて痛そうにしている人に向かって何よ!!」ジェスチャーを交えながら思いっきり日本語で怒りました。と、ビックリしたような顔でシュンとなってしまったのです。これには私の方が驚きましたが、重ねて「你有没有名片? 给我把! (名刺持ってる? 渡しなさい!)」素直に名刺を出してきたので「電話番号是。。。」と言うと、ものすごく慌てて会社には電話しないでとお願いしてきました。「まずは彼女に『对不起(ごめんなさい)』でしょ!」非を認めたがらない中国人ですが、私の怒りを見て謝りました。名刺を返して欲しいと言われましたが、後々のこともあるでしょうからと友人に手渡しました。

ネイティブレベルでない限り、日本人が外国語で怒りをぶつけることは難しいものです。街中でも殴ったりする気の強い中国人の奥様達、日本人の奥様は優しいと中国人男性は羨みます。あの運転手、自分の妻のような日本人が出てきてビックリだったのかしら。。。?



次世代へつなぐ恩送り

芳賀 久美

帰国生がそう珍しくなく、情報も格段に取りやすくなった今でも、海外で生活をした子供達が抱く感情や悩みに
は時代を超えて共通点が多いのでは。同じ境遇の帰国生たちに共感と未来へのヒントを届けられたらと思います。

このコロナ禍、私は以前から興味があったコーチングを学び、自分自身を見つめ直した結果「フレンズ」にたどり着きました。そのきっかけとなったのは東京 2020 でボランティア活動を通してある 20 代の帰国生との交流でした。実は私も 50 年以上前に羽田空港から飛び立った帰国生です。彼と話してみると時代とは関係なく多くの共通体験があり、親子ほど年の離れたその青年とまるで同志のような感覚に陥りました。と同時に現在の海外生活は日本人親子にとって改善された面もあれば、そうでない面もあるのではないかと思います。思いを馳せるようになりました。

私の最初の渡航先は南米のベネズエラでした。1968 年 12 月、母と二人で乗り込んだ日航機は NY で私達以外の日本人乗客を降ろし、地球の裏側まで飛んでいきました。半年前に赴任した父と再会できたのは 27 時間後の明け方だったと聞いています。3 歳になったばかりの私の下着を 3 年分用意し、味噌や醤油などと一緒に



NY 1970 年 父の愛車 Ford の前で

に船便で送ったような時代。首都カラカスでの生活はまるでモノクロ映画が突然カラー映画に変わったかのような、華やかな色彩帯びた景色を思い出します。私の海外生活は私自身の最初の記憶と共にスタートしたと言っても過言ではありません。真夏の強い日差しが差し込むリビングルームに飾ってあったキラキラと光るクリスマスツリー。トロピカルな鳥たちの鳴き声が響く動物園。他の駐在員家族と一緒にいったカリブ海の島々。お菓子が飛び出すピニャータ。幼稚園はアメリカンスクールに通っていました。しかし母国語さえもまだおぼつかない私は英語よりも日常生活で耳にしていたスペイン語の方が理解できたよう



ベネズエラ カリブ海の夕焼け

でした。幼稚園の思い出といえば、ある日突然、一学年上のクラスに連れていかれた時のこと。そのクラスの先生の発する言葉が全く理解できなくなりました。それまでスペイン語が主だったクラスが英語のみとなり、初めて外国語に直面し戸惑った瞬間でした。

その後アメリカ NY への転勤に伴い、キンダーガーテンから小学校 4 年生まで激動の 70 年代を過ごしました。反戦運動、人種差別撤廃運動、ジェンダー教育に触れて育った私は両親から日本語で話しかけられても英語で返すような「日本人の顔をしたアメリカ人の子供」に育っていました。そして 7 年間の海外生活を経て日本に帰国した私は否応なしに「帰国生」としてのアイデンティティと向き合うことになりました。

それまで自由奔放に世界最先端の暮らしを送ってきた私はイチから日本の文化や言葉を学び直しました。そして素晴らしい先生方や友人との出会いのおかげで徐々に私と「日本」との距離が縮み、漸く日本人らしくなった私は、私自身をも受容できるようになりました。「フレンズだより」を拝読しますと主に海外生活での体験が語られています。どの時代でも、どの国でも、どんな体験でも、親子にとって大切な宝物です。海外での苦労も後には良い思い出話となりますが、心の傷や違和感は皮肉にも帰国した時の方が大きいように思います。子供は柔軟に環境に対応できま

すが、感受性も強い。「これまで受けた教育方針と違う」「個性より協調性を重んじるのか」「自分は何人（なにじん）だろう？」勿論、帰国生でなくても直面する壁ですが、より強く、深く、長くダメージを受けます。それは母国の日本であるからだと考えます。私もその壁に直面し、なんとか乗り越え晴れて高校1年生に進学したその夏に今度は（当時の）西ドイツへ渡りました。

2度目の渡航はアメリカ時代とは全く別の海外体験となりました。インターナショナルスクールに転入できたものの、英語力はせいぜいネイティブの小学校高学年レベルだったと思います。発音は良いが、語彙力が乏しい。受験で文法を叩き込んだおかげで英作文や数学の点数は悪くなかったが、その他の教科の課題には2倍の時間を要しました。最初は英和辞典、日本から持参した参考書などを駆使しながら課題をこなそうとしましたが、やがてそれが無駄だと気づき「英語脳」に切り替えました。英語でインプットし理解することによって効率よくアウトプットできるようになったのです。友達作りも必死でした。スポーツや校内活動を通して、心を開いて友情を育みました。

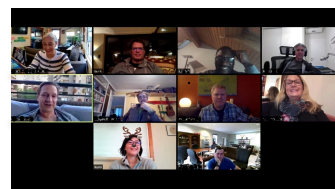


修学旅行でベルリンへ

「あれほど苦勞して日本で居場所を見つけたのにそれをおいてここまで来た。今エンジョイしないと損！」と自分に言い聞かせました。諦めが早い私の性格が功を奏しました。Full IB Diplomaを習得して充実した4年間を過ごしたのち、2度目の帰国を果たしました。日本での大学生活を満喫しつつアイデンティティ・クライシスで思い悩む日々が20代半ばまで続きました。その悩みから解放されたのは葛西臨海水族園で目にした巨大水槽の中を一方向に泳いでいたイワシの群れから、時折はみ出し、流れに逆らって泳ぐ一匹の魚を見た時でした。こんな私が一人いてもいいのではないかとフツと肩の力が抜けました。

昔は一度日本を出たら、日本の情報は簡単に入ってこなかった。今はインターネットの普及により、オンタイムで情報が溢れている。詳細に調べることができるし、簡単に問い合わせすることもできる。でもどちらも不安な気持ちに大差ないよ

うに思います。母親のワンオペ育児や子供の学校行事の参加に至り、昔も今もそう変わ



コロナ禍、ドイツ時代に通ったインターの高校でオンラインミニ同窓会を実施。参加者10人、6カ国、8タイムゾーンで調整

らないでしょう。むしろ今は海外進出している数多くの日系の私立校や塾、オンライン通信教育の普及により選択肢が増えた分、親御さんは悩むことが多いのではないのでしょうか。一人一人の貴重な体験が明るい将来へと導いていかれますように、何かお手伝いできたらという思いに駆られました。私が思い悩みながら成長できたのは、国籍や年齢を問わず多くの方から手を差し伸べられ、耳を傾けてくれたおかげだと感謝しています。そんな一人一人に恩返しがしたくてもできませんが、この受け取った恩を次世代に渡していくことならできる。そんな「恩送り」ができれば何より嬉しく、帰国生冥利に尽きます！

海外赴任者のバイブルといえば

海外赴任ガイド

海外赴任ガイド 検索

各種手続き、教育、引越、医療など出発前に知っておくべき知識と情報を網羅！



海外出国前のお車売却



海外赴任時専門の車買取
出国直前まで乗れる！
マイルもたまる！



車売却
ご相談

0120-322-755

Webからのお申し込みもできます！



ジェイシーエム
株式会社 JCM

全国対応可能！ 離島 沖縄は除きます。

本社：東京都千代田区神田錦町 3-13

JCMは皆様の愛車をオークション・業販等を通じて業界に供給する会社です。



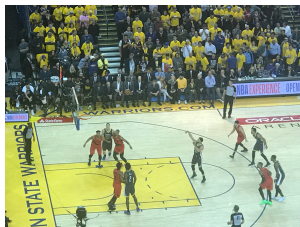
個人情報の取扱いについて・お客様からお預かりした個人情報は、本サービスを提供するために利用し、ご本人の了承を得ずに第三者への開示・提供や目的外での利用はいたしません。詳しくは <http://www.jcmnet.co.jp/common/privacy.htm> をご確認ください。【個人情報取扱いに関する問い合わせ先】株式会社 JCM 流通事業部 ryutsu@jcmnet.co.jp

RJ2203

海外スポーツ観戦体験

プロ、アマ問わず、スポーツには多くの人に感動と勇気を与える力があります。コロナ禍で改めてその大切さを実感した方も多いのでは。また応援の仕方、楽しみ方にも国民性があって、海外でのスポーツ観戦は日本でのそれとは違った楽しみもありますね。今回はそんな皆さんのエピソードを集めてみました。

【バスケットボール🏀】私達のアメリカ赴任が決まった時、娘のバスケットボール部顧問の先生から「アメリカに行くのだったから本場のNBAの試合を観ておいでよ」と言われたのが、NBA観戦の始まりでした。アメリカに引っ越してすぐ、NBAシーズンが始まったので地元のチーム（Golden State Warriors）の試合を観に行きました。全くチーム事情を知らなかったのですが、実は強いチームだったようで、その年はNBAチャンピオンとなり、いつの間にか家族全員で応援するようになりました。地元のチームに得点が入れば周りの人たちとハイタッチをして盛り上がるアリーナ全体の一体感は、アメリカのスポーツ観戦の面白さの1つです。当時八村塁選手が大学バスケットボールチーム（Gonzaga 大学）で活躍中で、これも地元の私立大学と同じリーグに属していたので、リーグ戦にも応援に行きました。試合が終わってから息子はサインをもらうことができました。このようにアメリカでのバスケット観戦の楽しい思い出が忘れられず、今でも日本からNBAを応援しています。



【テニス🎾】2014年ATPワールドツアーファイナルズに錦織圭選手が日本人初出場を果たした時、ベルギーからロンドン02アリーナに観戦にいきました。急に思い立ち、数日前にチケットを取ったので日帰りでしたがちょうどベルギーの祭日だったのもラッキーでした。観戦したのはフェデラーとの試合。屋内コートで大観衆が見守る中行われるテニスの試合に、圧倒されました。フェデラーの応援には、スイスの皆さんがカウベルを鳴らしていたのも面白かったです。思い立って観戦に行けるのは、海外駐在ならではの楽しみです。

【ゴルフ🏌️】マンハッタンからロングアイランド鉄道でおよそ2時間、全米オープンゴルフ・シネコックヒルズの観戦に行きました。電車がシネコックヒルズ駅に到着すると、満員の車内から拍手や歓声があがり、観戦気分を盛り上げてくれました。ゴルフ場に着くと、TVで見る選手が目の前を歩いている！練習している！それだけで感動。ギャラリーが静まり返り見守るプレイ、ティーショットの生の音、迫力は圧巻です。ケプカ選手の優勝を間近で見た全米オープンゴルフ。チケットが手元に届いたのは観戦の2日前、あまりの人の多さに電車に乗れないなどハプニングもありましたが、あの日見た選手のその後も気になりながら、いまは遠くから応援しています。



【野球🏟️】私たちがアメリカに住んでいた頃、MLBの試合を何回も観戦しました。MLBの球場は、日本と違ってバックネットがありません。ボールが飛んできた時には危険ですが、それよりも選手とファンの距離の近さや臨場感を大切にしているのだそうです。写真は松井秀喜選手が在籍していた頃のヤンキースタジアムで、ファンとの距離の近さがわかります。



またサンフランシスコジャイアンツ球場は外野の後ろがサンフランシスコ湾なので、ホームランを打つと湾にボールが飛んで行きます。ボートに乗ってホームランボールをゲットしようとするファンがたくさんいるのが名物です。

そしてイチロー選手。いつも同じルーティンで打席に入る姿や、ヒットを打って走る速さはため息が出るほど格好が良かったです。イチローが活躍した日、近くで一緒に観戦していたアメリカ人から「イチローは素晴らしい！」と私たちに声をかけてもらった時は、日本人として誇らしく思いました。



・今や全世界的に有名になった大谷翔平選手、2022年の開幕戦の先発ピッチャーということで、観戦に行ってきました。とにかくすごい人気です。大谷選手の17番のユニフォームを着ている人の多いこと。ロサンゼルスは「Back to



normal」となり、マスク義務もイベントなどの人数制限ありません。なので、立ち上がって大声張り上げて、大応援です。Angeles がヒットを打ったりすると、電光掲示板に「Make Noise」と表示されるくらいですから、それはもう耳をふさぐほどの大騒ぎです。大谷選手のピッチングはとてよかったです、バッティングがイマイチで、試合も負けてしまいました。それでもアメリカ人は陽気です。娘が中学生の頃にソフトボールをやっていたのですが空振りしても「good swing」、一塁に走ってアウトになっても「good run」と、何もかもポジティブに捉えます。プラスで評価していく国民性は素晴らしいと思います。私はスポーツ観戦が好きなので、海外赴任時の持ち物に日本の国旗とオペラグラスは外せません。これからも日本人びいきで色々な応援に行きたいです。

【アメフト】

アメリカではアメリカンフットボールはとても人気のあるスポーツです。息子が大学でマーチングバンドに所属し、アメフト



の試合のハーフタイムにパフォーマンスをしていたのがきっかけで観に行くようになりました。初めの頃は息子のパフォーマンスが終わると家路に着いていたのですが、何度も行っているうちにルールがわかってきて試合も楽しめるようになりました。選手のパワーやスピードもさることながら、プレーを組み立てる戦略が大きく勝敗に関わってくる部分が魅力のスポーツです。大学で活躍した選手がドラフトでNFLのチームに指名されると今度はそのチームを応援するようになりました。日本ではまだまだマイナーですが機会があったらまた観戦したいです。

【マラソン】

シンガポールに駐在していたころ、Sea Game というASEANの国々が参加する大会がありました。猫ひろしがカンボジア代表で参加するとのことで、沿道応援に行きました。シンガポールでは競技場以外で、他国の国旗を掲げることはできません。沿道って競技場??、と迷いながらも、私が持っているのは日本の国旗、猫ひろしはいまやカンボジア人なので、ここで日本の国旗を振るのもおかしいかな?といろいろな「??」が頭の中でめぐっていたのですが、思い切って振ってみました。スポーツがあまり盛んではないシンガポールでは沿道応援する人も少なく、私が日本の国旗を振っていてもだれも気にする様子もありませんでした。そしてゴール後に競技場で猫ひろしに会うことができ、日本の国旗を掲げながら一緒に写真を撮ってもらいました。



フレンズの活動あれこれ

フレンズ帰国生母の会は来年で創立40周年を迎えます。立ち上げ当初のお母さんたちの志を受け継ぎつつ、時代に合わせて少しずつ変化しながら活動しています。今回はそんな私たちの活動内容の一端をご紹介しますと思います。

「帰国生のための学校案内」(首都圏版)

私たちの活動の中心であり、最も大切にしている活動です。帰国生を受け入れてくださる学校に足を運び、生徒さんや先生から直接お話を伺い、その学校の良さや特徴をお伝えすることで、お子さんに合った学校選びの一助になればという思いで制作しています。

作り続ける意義

世界中どこにいても、インターネットで学校の入試情報が得られる時代になりました。それでも「何故『帰国生のための学校案内』(以下「学校案内」)』を作るのか?」と疑問に思うかもしれません。『海外校に在学』と言っても、海外に行った年齢や滞在期間、海外校の種類、日本の学習環境の状況などはそれぞれ異なり、一括りにすることはできません。帰国後に日本の学校に入る時にも一人一人条件が異なってきます。帰国の子どもたちそれぞれにあった学校を選ぶには、情報をまとめて得られる「学校案内」の存在は不可欠です。

「学校案内」の良さとは?

フレンズの「学校案内」には、スタッフが我が子の受験の際、親として知りたかった情報を網羅しています。学校のWebサイトやパンフレットには載っていない情報も伺っています。その中で、学校を探すための必須項目が、出願資格、受験科目、帰国生の入試結果と編入学の詳細です。学校選びのご相談では、海外歴や学習状況に加えて本人やご家族の希望を伺って「学校案内」をめぐりながら学校を紹介します。条件が合致する学校を探すには最短で最適です。

さらに、帰国生がある程度在籍する学校には、帰国生入試の詳細や入学後の受け入れと学習指導、学校生活の様子を取材し、その記事を載せています。帰国生が相当数在籍する学校には、帰国生に海外生活から入試時のこと、学校生活についてインタビューし、記事をまとめています。各校のWebサイトが充実し、学校から発信する情報はどこでもいつでも入手できます。ただ、国内にいれば入ってくる周りからの学校の評価、

学校見学で直接感じ取れる学校の状況など、海外では生徒や保護者サイドからの情報はなかなか入ってこないものです。「学校案内」の記事から、母親目線での学校の姿を読み取ることもできます。

新しい情報入手!

学校も変化します。親や祖父母世代の通学していた時とは大きく異なる学校も多いですし、また、中高時代を首都圏で過ごしてこなかった方が海外から首都圏に戻られる場合にも学校を知る手立てが「学校案内」にはあります。首都圏の学校は国立、公立、私立とも膨大です。「学校案内」には入試時に帰国生を受け入れる学校のみ掲載していますが、それでも300校以上あります。帰国後の居住地によって通学できる学校も限られるとはいえ、学校選びには時間を要し、悩むところです。

毎年いくつもの学校が受け入れ態勢を変え、新たに学校が設立され、また帰国生入試を始める学校が出てきたり、逆にやめる学校もあつたりと、毎年発行していればこそ新しい情報を発信することができるのです。

受け入れ態勢いろいろ

帰国生を受け入れると言っても、その態勢はさまざまです。大きく分けると、日本の学校へのソフトランディングを目的としている主に国立の小中学校、海外で培った国際力を伸ばすことを目的とした学校、在校



学校種別でフォルダ分けし、スタッフは学校から届いた書類を元に担当校の情報を更新したりお互いの原稿をチェックし印刷に回します。印刷が上がった原稿も複数の目でチェックし、ミスがないよう心がけています。

生に海外経験の好影響を期待する学校です。受験科目が似ていても、入学後の学習は異なるのです。「何故帰国生を受け入れるのか？」受け入れ態勢も取材しています。ご相談時、保護者が挙げる学校名にはタイプが真逆の学校がある場合があります。入学校の態勢が希望と異なっていたと編入学のご相談をされた方もいました。帰国後の学校に何を望むのか、お子様には何が必要なのかを考え、学校名だけで受験を決めることのないようにしたいものです。

備えあれば...

「帰国生であれば望む学校に容易に入れるし、いつでも編入できる」と勘違いされる方もいて、いざ帰国となると希望していた学校が受けられなかったり、編入の枠がなかったりと困ることになります。これから海外に行くというときに帰国後のことを考えることは難しいですが、中には「〇〇年の駐在ですから」と予め「学校案内」を購入して対策する方もいます。海外校での学習は大変なことも多く、できるだけ伸び伸びと過ごしてほしいと願っていますが、少し予備知識を入れておくことは必要かもしれません。

「学校案内」があればこそ！

海外校で不登校となり帰国後の編入に悩んでいるご相談、周りがよくできる帰国生ばかりで行く学校がわからないというご相談、突然帰国になり初めての日本の学校に戸惑うご相談等々、たくさんのご相談に「学校案内」から学校を探してご紹介してきました。「こんな学校があるとは知らなかった」という声もよくいただきます。無事に学校が決まり、楽しく通学していると嬉しいご報告をいただくことで取材や編集の苦労が報われます。また、取材に応じる帰国生から、帰国して驚いたこと、困ったこと、将来の夢など素直な帰国生らしいエピソードを聞くことも楽しみです。自身の力が発揮でき、伸び伸びと学校生活を送れる帰国生がひとりでも多くいることを願ってより良いものを作り続けていきます。



学校訪問では生徒さんからも直接お話を伺います。海外で経験した苦労や努力は国を問わず共通点が多く現在の学校生活が充実している様子を聞くのは我々にとっても喜びです。

赴任前・帰国後相談

スタッフの共通点は「海外で子育てを経験した」ことです。時代、国、子供の年齢や性別によって悩みや苦労の種類は違いますが、一方で共通点もたくさんあります。だからこそ、海外駐在が決まった時の戸惑いや不安、駐在中の悩み、そして帰国時に直面する課題に、我々は共感を持って体験談をお話しします。面談後、「赴任地に行くのが楽しみになりました」「気持ちがラクになりました」と言ってもらえるのが何よりの喜びです。

いつの時代にも寄せられる海外赴任前のご相談

当会発足から40年近くになりますが、その間に社会は大きく変化し、今では海外赴任先の情報を誰でも簡単にインターネットから入手できる時代になりました。それでも、現在も赴任前のご相談には、海外での生活や帯同されるお子様の教育など様々なご不安やご心配についての質問が多く寄せられます。

「多くの情報が氾濫していてどれを信用すればよいのか判断が難しい」「何から準備を始めたらいいかかわからない」「赴任先に日本から何を持って行くべきか」「現地で日本食材は入手可能？」「居住地の決め方は？」「海外の子どもの通学校をどのように決めたらよいか迷っている」「子どもを帯同する時期と編入学のタイミングはいつがお勧め？」「予防接種について」「生活に車は必要？」など多岐にわたります。

赴任前セミナー係の役割

相談のお申し込みをいただいたら、まず、ご相談者の赴任についての詳細を確認します。赴任先の国・地域、赴任時期と期間、帯同家族について、海外赴任経験の有無、特別なご質問内容について、等々。帯同子女の年齢も重要な確認事項のひとつです。

次に、これらの情報を元に、ご助言に最適な担当者を探します。現地生活を経験したスタッフ約30名とネットワーク会員約50名の海外在住歴や経験などと照らし合わせ、ご相談者の立場に立ってじっくり検討します。例えば、お子様を帯同される場合は、お子様の年齢から、担当者が海外で子育てした経験や子どもの通学校の種別（日本人学校、現地校、インター校）なども考慮したうえで、ご相談者と担当者とのマッチングを致します。マッチング決定に至るまでには、かなりの集中力とエネルギーを使って取り組んでいます。

ご相談時に配慮していること

ご相談者によってお一人おひとりのご事情は異なるため、さまざまな状況に配慮してご相談者に寄り添って助言します。ご相談にあたっては、担当者の経験を踏まえたうえで、偏った情報とならないよう客観的な観点からお話するように努めています。

社会の変化に応じて

2020年春には、コロナ禍で海外赴任前相談のお申込みが一時激減しましたが、いつお申込みが入っても安心してご相談いただけるような態勢を整えることに注力しました。オフィスにはアクリル板を設置し、更にオンラインでの対応を可能にしました。現在もまだコロナ禍は収束していませんが、多くのご相談にオンラインで対応しています。

赴任前相談に加えて文科省研修会でも

係では、主に当会の賛助企業向け海外赴任前セミナー及び個別相談会を担当しています。その他にも、2000年より毎年文部科学省からのご依頼で「保護者の期待する日本人学校／日本語補習授業校」というテーマで、スタッフが海外在住中に子どもを通学させた経験から講義させていただいています。講師はスタッフが交代で務めていますが、その調整なども行っています。

サステナブルな活動

1983年に当会を発足した目的のひとつが、海外生活で得た経験を個人のものとして完結することなく、広く社会の皆様と共有しより良い社会を築いていくことでした。赴任前セミナー係の仕事は、発足当時のスタッフの思いを継承し、まさに活動の目指すところに直結するものであると感じます。

面談後にご相談者から、「実際に海外在住経験のある方からのお話が聞けて安心しました」「海外赴任が楽しみになりました」などのお言葉をいただくと大変嬉しく、このうえもない喜びを感じ活動の励みになります。ひとりでも多くの方が海外赴任を前向きに捉えてくださり、充実した海外生活を送られることを願って活動を続けて参ります。

～スタッフから～

娘が帰国生インタビューを受けたことがきっかけで、フレンズを訪れました。海外に15年住んで、何か役に立てることがあればいいなと思っていましたが、できることがあるのかと不安もありました。訪ねると活動しているスタッフの皆さんが、とにかく素敵でかっこよく見えました。わたしもあんな風になりたい！と思いました。毎週仲間と会って話すのもとても楽しい時間です。海外生活あるあるを気兼ねなくおしゃべりできるのも、フレンズならではの。

入会してまず、スタッフ全員が帰国生やそのご家族のために真摯に取り組む常に前向きな姿勢に感動しました。そして何よりうれしい瞬間は、学校案内の本来に掲載されている帰国生インタビューやフレンズ担当者の記事に対し「母親目線の記事でとても参考になりました」との感想を聞いた時。赴任前に多くの不安を抱えて暗い表情の相談者の方に、自身が体験した現地でのかけがえのない経験や出会い、家族の結束、海外に出て改めて感じる日本の素晴らしさなどをお話すると、最後には表情もパッと明るくなり笑顔で「赴任が楽しみになりました！」とお言葉。いずれも感激です。

渡英前に相談したことを思い出し、帰国後勇気を出してフレンズにメールしたのが15年前。それから数多くの素晴らしい先輩や仲間との出会いを繰り返してきました。私にとってのフレンズの魅力は「人」です。海外での苦労や喜びを何にも教えず共有でき、多くを教わり、力をもらえる。仕事でも趣味でもない、でも確かな自分の居場所。だからこそ続けてこれたのだと思います。

帰国受験は一般受験に比べると圧倒的に募集人員が少なく、海外では特に、頼れる情報も限られていて非常に心細く感じていました。日本に帰国する帰国生は毎年小中高合わせても1万人程度なので情報が少ないのは仕方がないところですが、そんな中「学校案内」で娘が良い縁をいただき、私もこの会に興味を持ち入会しました。さまざまな学校と関わることで視野がずいぶんと広がり、学校の取材では前途あふれる帰国生が新たな環境で頑張っている様子をうかがえることが多いので、やりがいのあるボランティアだと思っています。我々の取材がまた別のお子さんのご縁につながれば、という思いで活動しています。

入会当初は、ご相談にお答えするだけと思っていましたが、原稿を書いたり、学校案内を制作し売ったり、対外的な活動に参加したり、内部の事務処理を行ったりと、いろいろな仕事を皆でこなすことで会が成り立っていることを知り驚きました。チームワークの良さに加え、なんとスタッフの事務処理能力やマネジメント能力の高いこと！「母の会」ですが、ただの母達の集まりでないことを知るのでした。

1. 海外赴任に関する相談、問い合わせ

① 電話による相談 : 12 件、② メールによる相談 : 17 件、③ 面談による相談 : 7 件

2. 賛助企業依頼による海外赴任前セミナー

① 個別面談 (Web) 87 件、② 個別相談 (メール) 2 件、③ 講義 (Web) 1 件

3. 『母親が歩いて見た帰国生のための学校案内 2022—首都圏版 中学・高校編』2021 年 9 月発行

取り上げた小学校・中学校・中等教育学校・高等学校・高等専門学校 : 約 320 校 発行部数 900 部

4. 機関誌『フレンズだより』 76 号 (6 月発行)、77 号 (12 月発行) 各 2000 部

主な配布先 : 賛助企業、文部科学省、公益財団法人海外子女教育振興財団、海外全日制日本人学校/補習授業校、首都圏の小学校・中学校・高等学校、教育関係機関、諸団体、国内・海外定期購読者、来訪者、他

5. 勉強会

・海外子女教育専門相談員連絡協議会定例会及びWEB相談員連絡会 参加・報告

6. 対外活動

- ・海外子女教育専門相談員連絡協議会にメンバーとして参加
- ・文部科学省「在外教育施設派遣教師研修会」にて講義 (Web) 「保護者の期待する日本人学校・補習授業校」
- ・賛助企業依頼による海外赴任前セミナー (主に Web)
- ・寄稿 : 『海外赴任ガイド』『母たちの海外体験談』他 (株式会社 JCM 発行)、『月刊グローバル経営』『P l a z a 海外生活』(一般社団法人日本在外企業協会発行)、『週刊 N Y 生活』『教育なんでも相談室』(ニューヨーク生活プレス社発行)、『帰国便利帳』(Y' s Publishing Co., Inc. 発行) 他
- ・協力 : 『月刊海外子女教育』(公益財団法人海外子女教育振興財団発行) 2022 年 3 月号特集記事「帰国生の母親たちのボランティア」、他

7. 来訪、お問い合わせ、取材を受けた団体・企業・学校 (順不同)

公益財団法人海外子女教育振興財団、株式会社 JCM、株式会社早稲田アカデミー、国際高等学校 (愛知県)、Y-SAPIX Global Campus、Y' s Publishing Co., Inc.、株式会社アイウエア (JOBA)、一般社団法人日本在外企業協会、グローバル化社会の教育研究会 (EGS)、NPO 法人海外安全・危機管理の会、他

8. 『母親が歩いて見た帰国生のための学校案内 2022』にご協力いただいた団体・企業 (順不同)

公益財団法人海外子女教育振興財団、プチボア (ベルギー)、タイランドハイパーリンクス、Mix B (12 都市)、ニューヨーク生活プレス社、株式会社 JCM、Y' s Publishing Co., Inc.

2021 年度ご賛助くださった企業 (順不同)

東京海上日動火災保険株式会社、キャノン株式会社、トヨタ自動車株式会社、本田技研工業株式会社、パナソニック株式会社、株式会社ブリヂストン、株式会社 JCM、花王株式会社、日清食品ホールディングス株式会社、日本製鉄株式会社、株式会社早稲田アカデミー、株式会社リロ・エクセル インターナショナル

2021 年度機関誌『フレンズだより』広告掲載してくださった企業 (順不同)

株式会社 JCM、日本通運株式会社

『母親が歩いて見た帰国生のための学校案内 2022』広告掲載してくださった団体・企業・学校 (順不同)

S A P I X 国際教育センター、早稲田アカデミー、国際基督教大学高等学校、国際高等専門学校、昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校、東京都市大学付属中学校・高等学校、富士見丘中学高等学校、立教英国学院、大妻中野中学校・高等学校、海城中学高等学校、淑徳中学校高等学校、湘南白百合学園中学・高等学校、白百合学園中学高等学校、東邦大学付属東邦中学校・東邦高等学校、三輪田学園中学校・高等学校

皆様のご支援に厚く御礼申し上げます。

2023 年度版 予約受付中!!

母親が歩いて見た

帰国生のための学校案内

首都圏版 中学・高校編

価格 国内:3,740 円(税・送料込)

海外:3,400 円(送料別)



1 確かな情報



学校から直接いただいた情報を掲載。帰国生入試の詳細、入学後の配慮、学校選びや受験勉強のポイント、入試時の様子など、学校のホームページや説明会では得られない情報をお届けします。

2 訪問してわかる学校の素顔



先生や帰国生からお話を伺うと学校のカラーや雰囲気がよくわかり、訪問前に抱いていた印象と異なることもあります。学校に足を運ぶことが難しい海外在住の方にも感じ取っていただけるよう、記事を書いています。

3 Simple, Honest & Fair



フレンズスタッフの体験から、本当に欲しくて必要な情報を各校同じ形式で平等に掲載しています。帰国生の受け入れ態勢を重視し、偏差値では計れない学校の状況をお知らせします。

4 編入学実施校が見つかる



フレンズスタッフが突然の帰任に際し、一番苦労したことは編入試験を実施している学校を探すことでした。編入受け入れの有無、試験の形態、最終受け入れ時期を全校掲載しています。

フレンズ HP で予約受付中の他、9月16日以降、Amazonでご購入可能です。

帰国生 学校案内

検索



5 さまざまな情報



各都県の各種相談窓口や寮のある学校一覧、またフレンズスタッフがお伝えしたい留意点なども記載。『受験体験記』では「受験校に至るまで」「入試の様子」「入学、その後」を保護者の視点からお伝えします。

お知らせ

フレンズと一緒に活動してくださるスタッフ募集中!

無理なく楽しく、をモットーに、各自希望の曜日に週1回、銀座のオフィスで活動しています。コロナ禍でオンライン化が進み、在宅での作業も可能になりました。海外生活の経験を生かしてみませんか?

ご興味ある方は以下連絡先にいつでもお気軽にお問い合わせください。

編集後記

フレンズの活動は来年40周年を迎えます。海外での不安な生活と帰国後の我が子の教育に悩んだお母さんによって立ち上げられたこの会は、情報が溢れる今もなお同じ不安や悩みを抱える方々に寄り添い続けるべく活動しています。我々の活動を知っていただき、1人でも多くの帰国生に必要な情報を届けたいと願っています。

発行/フレンズ 帰国生 母の会

〒104-0061 東京都中央区銀座 5-3-16 日動火災・熊本県共同ビル 8 階

TEL 03 (6633) 4096 FAX 03 (5537) 3416 Email:fkikoku@gaea.ocn.ne.jp